

ウイグル古典文学と東西文化の関係について

—ウイグル族古典文学簡史（下）—

マイマイティミン ユスブ
买买提明・玉素甫
高橋 庸一郎（訳）

ウイグルの学者達、ユスブ・ハジ・ハジプヤムハメド・カシカリの誕生の地である新疆ウイグル自治区は今この地の有名な息子達を満足させるにちがいないであろうようなスピードで発展しつつある。新疆ウイグル自治区の人口の主要な部分を占めているのはウイグル人である。この地には多様な信仰を持った47のそれぞれ異なった人種の人々が住んでおり全人口13,081,700人のうち、769万人が非漢民族であって、それは全体の58.95%をしめている。ウイグル人の人口600万人は全体の46.49%を占め、漢族は40.41%、カザフ人は6.1%である。そしてこのほかには、回族570,800人、蒙古族117,500人、キルギス族113,000人、シボ族27,500人、タジク族26,500人、ウズベク族12,500人、満州族9,200人、ダフル族4,500人、タタール族4,200人、ロシア族2,700人等の諸民族が住んでいるのである。（上記の数値は1982年の人口調査による）更に少数の人口を擁する民族としては、東郷族、壮族、サラ族、チベット族、ミヤオ族、イ族、布衣族、それと1949年以降内陸部の他の地方からやってきた朝鮮族等がおり、彼らの人口は全部で31,000人である。これらの少数の人口を擁する諸民族のうちそのほとんどはそれぞれが独自の言葉と文字を持っており、その中のいくつかの民族は互いに同じ言葉と文字を使用しているのである。また、彼らの持つ宗教的信仰もそれぞれ異なっているが、これもいくつかの民族は互いに同じ宗教を分け合っているということもあるのである。そして同じことが彼らの風俗習慣についても言えるのである。ウイグル族、ハザク族、回族、キ

ルギス族、タジク族、ウズベク族、タタール族、サラ族、それに東郷族の人々は一般的にはイスラム教を信仰している。新疆に住む人々の宗教的信仰の違いは、彼らの歴史的地理的要因に負っているのである。

1. 地域的自治について

1954年、5の地区と6の県と36の都市が自治を確立した。新疆ウイグル自治区も1955年の10月に正式に自治区として成立した。それ以来偉大な成功が、政治の上でも、経済の上でも、文化の上でも収められたのである。そのためその地域的あり方とこの地の人々の精神的視野は深遠なる変化を経験したのである。1986年の終わりまでに、この自治区の工業と農業の生産高の総計は163億9,600万元で、1949年の20.5倍に当たり、これはその当時以来生じた変化の説得力ある例である。

2. 教育について

文化、教育、衛生、体育教育、ジャーナリズム、公共ラジオ放送、テレビそれに科学研究等の方面における発展は極めて注目すべきものがある。1949年には、新疆には1つの研究機関も存在しなかったのであるが、1986年の終わりには工場、企業、農場の構成単位として増加してきた研究機関を除外しても100を超える数の研究機関が存在するようになったのである。1986年末の統計によれば、有望な経済的社会的成果を、その発展的技術によって生み出した

174,000人の自然科学研究スタッフがいるのである。社会科学の方面においては82の、それぞれ異なった学術的機構と学会が存在し、彼等の報告は各機関の事務的決定に反映されるような貴重な意見を提供したのであり、更に彼等は党と政府機構が政策決定するに当たって、協議のための広い範疇を設定するのに奉仕したのである。1949年にはこの1,650,000平方キロメートルの土地に1,300の学校しかなく、それぞれのクラスに登録されている児童は200,000人に満たなかったのである。また中学校あるいはそれと同レベルの職業学校は20校あって生徒数は4,000人を少し越えるぐらいであった。またより高いレベルの教育を施す学校はただ1校だけ設立されていて、生徒の数は379人であった。現在我が自治区は8,500の小学校と7,950の教育所を持っており、生徒数は2,000,000人を越えていて、これは1949年の10倍である。そして就学適齢児童の94.21%は各教育機関に登録されているのである。また中学校は2,140校あり生徒数は1,000,000人で、1949年よりは300倍に増えたことになる。設立されたより高級な教育機関は、1校から13校に増え、生徒の数も50倍に増えたのである。また93の専門訓練教育単位もある。それに労働者や事務職員に対する特殊訓練や业余教育も有望な成果を上げている。農業学校も出現し、中学校における商業科クラスは699クラスにまで成長し、生徒数は47,000人を越えている。1部が労働者や事務職員のためにも設立された商業科コースや工業科コースもある。少数民族の事務職員や労働者に対する教育を発展させるために設けられた工業科コースはそれぞれ異なった訓練をウイグル語で行い、こうしたコースを取っている若者の数は総合大学の学生数に匹敵する。第3回人口調査の結果は、自治区人口の60%以上の人々が小学校か、中学校、あるいは単科大学のいずれかの課程を終えていると示している。これは即ち6歳以下の子供、あるいは60歳以上の大人をのぞいて、文盲人口あるいは半文盲人口は減少しているということを示している。我が自治区は

200,000人の教育職員を擁している。3つのより標準的な学校が最近設置され、また同時にホータンの普通学校と21の中等レベルの普通学校がその教育訓練計画を再開した。更に上に述べてきた以外に、近い将来、10の普通学校が追加されることになっているのである。

3. 芸術と映画産業

1949年以降より高いレベルの教育機関が中国全土において、新疆からくる人々を訓練するのを支援する体制が整えられてきた。1982年だけでもこうした養成機関が、芸術の面での30の異なった部門で347人の専門家を訓練し、そのうち80%は非漢民族であった。新疆映画製作所は1950年に設立され、そこで500本の映画が作られ、正式に上映ルートに乗せられた。現在自治区には100以上の芸術団がある。ウイグルの人々の音楽遺産である「十二ムカム」は選ばれて、政府から財政的援助と精神的支援を獲得することができた。こうした古典ウイグル・ムカムの保存に当たっては、楽士達がそれらの作品の分類と記録を支援するために招かれたのであった。このプロジェクトは国際的なムカム楽士達の関心を大いに引き起こした。

文化的活動は新疆の広大なすそ野の広がりを持つ地域にたくさんある。91の文化活動センターがあり、61の図書館、224の映画館と劇場、3,039の映画製作チーム、それに106の、広大な地域の人々に奉仕する芸術団が存在しているのである。

4. 言葉とテレビ

「新疆日報」は常にウイグル語、漢語、ハサク語と蒙古語で発行されている。個々の自治県は彼等自身の言語で新聞を発行している。自治区で発行されている56種類の新聞のうち30種は民族語即ち非漢語である。人民放送局はウイグル語、漢語、ハサク語、蒙古語それにキルギス語で放送している。北京の中央人民放送局もウ

イグル語とハサク語による放送を行っている。大都市の放送局とは別に県や小都市には85の局があり、184の異なった農場にもそれぞれ局がある。全村の80%は自分のラジオ局を持っている。新疆テレビ局はウイグル語、漢語、ハサク語をつかったプログラムを持っており、また15の郡や町、4つの県は彼等自身のテレビ局を持っている。自治区の86の県はテレビ番組への進出法を持っている。昨年7月の初め新疆のテレビ番組が北京や太平洋岸の地域でも、衛星の助けを借りてみる事ができた。

5. 出版

新疆の出版事業はことのほか速い速度で発展している。1986年には680人の従業員を抱えた12の出版社がすでにある。そのうちの11社はウイグル語で、8社はハサク語で、4社は漢語で、2社は蒙古語で、また2社はシボ語でも出版している。1985年にはこれらの出版社は169種類の出版物を世に出した。新疆人民出版社だけで現在10,319種類の本と雑誌を出版している。新疆における出版物は香港、マカオ、日本、アメリカ、そしてソ連、ドイツ民主主義共和国、オーストラリア等にも送られている。174台の印刷機械は止まることがなく117の書店は県単位にまで行き渡り、402の露天の本売場や174の農村部の雑貨店内書籍コーナー等は決して顧客に不足してはいない。北京の民族出版社も400種以上の印刷物をウイグル語、ハサク語、蒙古語、シボ語、そして朝鮮語で出版している。

6. 衛生(健康)

政府は衛生と健康を特に重視している。各組織と単位は1949年の60倍の要求に奉仕している。病院のベッドの数は90倍に増加し、健康と衛生に携わる人員は169倍にまで増えた。現在新疆には2つの大学レベルの医学学校があり、20の衛生と健康に関する中級程度の学校がある。また4,000人の高級医療従事者と16,000人の

中級医療従事者が養成されている。それぞれの県レベルの病院には100人の医療スタッフがあり、100床以上のベッドを持っている。自治区全体を通じては医者と医療スタッフのいる643の都市と7,285の村がある。

7. 観光

外国人旅行者が初めて新疆を訪れ始めたのは1978年のことにすぎない。今日まで、いくつかの都市や地域が旅行者のために徐々に多く開放されるに従って、香港、マカオ、台湾そしてその他の世界各地からの観光客がこの自治区の自然豊かな観光スポットを訪れて楽しむようになった。それらの中には天池、火炎山、チモール山、高昌故城、ベゼクリウ千仏洞のような旧跡や遺跡など、その名をあげれば33の開放されている観光地点があり、そのほか近代の公共建築物でそうした民族文化の反映されている54の場所があるのである。

1986年に自治区に観光にやってきた48,500人の旅行者は、香港、マカオ、台湾等の国と地域からで、それは前の年の1.1倍である。149の旅行会社が標準的ホテルの客室の970のベットと292のエコノミークラスの宿泊サービスを旅行者に提供したのである。こうして旅行産業として8億5千6百万ドルの収入を得たのである。

8. 宗教

新疆全土には様々な教会や仏教寺院や磨崖仏がある。この地の人口のうちの1,300万人をしめるウイグル、カザフ、回、タジク、ウズベク、タタール、サラール、東郷、それに保安の各民族は積極的にイスラム教を信仰している。蒙古族、ダウール族とチベット族はラマ教を信仰し、一部のシボ族はシャーマニズムを信じているもののそのほかのシボ族はラマ教を信仰している。新疆には100,000人以上のラマ教徒がいる。モスリムは13,000の回教寺院と宗教活動のためのセンターを持っている。2,000人以上の人々が

各宗教集団から選ばれて人民会議や人民政治協商会議、またその他の自治区レベルの宗教機構に参加している。そして3,000人以上の、政府から援助を受けている聖職者がいる。190人の人々が中国イスラム協会、エルス・ヘル・エクトプト大学や100,000部のコーランのコピーをこの地域のモスリムに提供した新疆イスラム機構の監督するそれぞれ異なったクラスで宗教学校訓練を受けている。アラビア語を解せないこうした人々をたすけるために「ブハリ・スクリプチャーズ」はコーランを漢語やウイグル語に訳して140,000のコピーを配布したのである。コーランは今ウイグル語に訳されており、これは新疆のモスリムにとって前例のないことであった。中国イスラム機構とほかの関係支部の整理統合の下で、近年毎年多くのイスラム教徒達が聖地メッカに巡礼の旅をし、また巡礼の旅に関係のある所を訪ねる人々の数も増えつつある。モスリムの聖職者達は中国イスラム教協会に組織され宗教事務のための支部連合局は他のイスラム教国への友好的な訪問を行っている。

9. 古典文献の出版

現在我々は1,000以上のウイグル語の手書き写本を持っている。1986年から1987年の間だけでも中央民族出版社と新疆の他の出版社は共同して、ウイグル語、ハサク語、キルギス語の古代文献24巻を出版した。そしてそれは1990年の方針によって更に80巻にまで増加されることが計画されている。

出版された24巻のうち21巻は、翻訳されたチャガタイの手書き写本である。

それらは：

- (1) 『福楽知恵』のビエンナ(ウイーン)写本
- (2) 『福楽知恵』のカイロ写本
- (3) 『福楽知恵』のフェルガナ写本
- (4) イスラ・ピラ編集による『マイテリヤとの対話』のウイグル語訳
- (5) テイピジャン編集の『ニザーの詩集』

- (6) イミン・ツルヂ編集の『ザリリの詩集』
- (7) アニワル・ビチル編集の『ハミットの歴史』
- (8) マイマイティミン・ユスブ編集の『マクスフル集』
- (9) アジ・ヌル・アジ編集の『ジンギスカンの生涯』
- (10) アブヅシュクル・ツルヂ編集の『世相の記録』
- (11) クルバン・ワリ編集の『キジル千仏洞』

党と国家は少数民族の古代文献の収集、選別、編集、翻訳、出版に重大な関心を寄せており、将来より多くの仕事がなされるものと予想される。

10. 産業と交通

1949年以前新疆の産業は空白であったが今は完全なシステムを持っている。現在新疆には4,000以上の企業があって2,000種類以上の生産品を製造している。我々は多くの製品を自分達でまかないまた我々の生産品の膨大な量を外国に輸出しているのである。交通もまた意義ある方向でより良い変化をとげた。蘭州——新疆鉄道のレールがウルムチまでのびたとき、この地方の鉄道のない歴史は終わったのである。2,232キロメートルがその使用下にあり、今では1,470キロの鉄道がウルムチを中心として、南にはその幹線はコルラに及びまた北へは東アジアを経て、ヨーロッパ大陸、アジア大陸と中国を結び、ウスとアラタウ間への延長レールは現在建設中となっている。高速道路輸送は今22,232キロの道路が使用されており、そして88,234キロの高速旅行バスが運行され、すべての県にまでのびているのである。すべての村は高速道路を持っており、すべての主な道路は舗装されている。

新疆には中国で最も優れた空港にランクされ

るような民間航空ネットワークを持った21の空港がある。この地区に出入りする航空路は全部で11,500キロで、一年間の乗客数は100,000人以上である。ウルムチ空港は他の内陸部の大都市や地域と結ばれているばかりでなく、国際航空路への重要なアクセスとしてもその役割を果たしている。北京とイスタンブールを結ぶ重要な経過点がウルムチである。

この地域の郵便と通信事業は不断に改善されている。郵便局はこの地域全体を通じて極めて遠方の地方にまで設けられている。1986年には郵便物を大都市や県、町や村や辺鄙な農村にまで配達する郵便局は1,199あり、十分に人々の用をまかなっている。町の99.5%、そして村の98%は郵便と通信システムラインを持っており、町の97.8%、村の46.5%には電話が引かれている。また衛星通信を受信するシステムがウルムチに設置されれば通信事業は更に飛躍的な発展を遂げるであろう。

11. 人々の生活水準

経済の発展に伴って、我が自治区の人々の生活水準は著しく改善された。人々の収入の増加は銀行預金の増加によってもうかがえる。1986年の終わりまでで、銀行貯金の総額は4,547億元に達している。また同時に人々の住宅条件も、住宅環境と同様に大いに改善された。しかし人々の福利厚生を増進のためには、我々はまだまだ他の多くの問題を解決しなければならない。新疆は中国国内で我々が一つの経済圏を構築するのにまだ潜在力を秘めた広大な未開発地域を残している場所である。それ故に2000年までにこの自治区における生産高は1980年と比べておそらく5倍に増えているに違いないし、そしてそれは恐らくその時代の国内の中級レベルより高いものであるに違いない。

12. 幹部

我が自治区では少数民族幹部の養成にとりわ

け多大な注意を払ってきた。1949年には新疆全体を通じて少数民族幹部は3,000人にも満たなかったが、1986年の終わりには211,380人にまで増加した。区の各部局レベルでは、その指導的地位にそれぞれ異なった民族的背景を持つ402人の幹部がいる。自治区の人々は憲法と民族地域における自治法に明記されている特権を十分に享受している。自治区の人民代表会議に対する少数民族代表はその人口比率をはるかに越えたものとなっている。人民代表会議、政治協商会議、最高人民法院、また行政官や他の高級政府機関等のトップはすべてウイグル人でしめられている。現在それぞれ異なった民族背景を持つ幹部達はすべて対等の立場で協力しあい、新しい開拓者達にこの自治区の仕事をもたらすために、相互の信頼と尊敬の上に立って一緒に働いているのである。

13.

我々は外国の研究者や友人達が訪問旅行や学術交流のために、新疆を訪れることを歓迎している。我々は知識と研究成果の増進のために外国の研究者達と広範な学術交流を組織する準備をすでに整えているのである。

訳者注

- 1) リイ・シエンリン (Li xianlin) 李羨林。北京大学歴史系教授 インド史 インド文学専攻
- 2) クタディクビリク (kutadkubilik) 福楽知恵。本稿(中)第二章に詳しい解説がある。紀元11世紀、カラハン王朝時代、ユスブ・ハジ・ハジブによって回紇語で書かれた一大長詩。後人の校勘、整理を経て、現存しているのは13290行、本文85章と3篇の附篇からなる。その他に2篇の序言が付いているが、これが著者自身の手になるものかどうか未だ定説がない。ユスブはパラサフン(現在のキルギス共和国、タクマク市の西、アクピシナー帯)の人

この書がどういう書であるのか、その概略でも

- 解せるようにその主な章の目録を出しておく。
- 第四章 麗しき春の日と偉大なるブカラ汗への賛歌
- 第五章 七曜と黄道十二宮を論ず
- 第七章 言語の得失と利害を論ず
- 第九章 善行への賛歌と併せてその有益なることを略論す
- 第十章 知識、智恵と才能の効用
- 第十一章 書名の意味と筆者の晩年
- 第十二章 物語の始まり——日の出王についての叙述
- 第十三章 月円、日の出王の王城へ到来す
- 第十四章 月円、日の出王に謁見す
- 第十五章 月円、国王に向かい、自分が幸運の代表であることを説く
- 第十六章 月円、国王に向かい、幸運の本質について明述す
- 第十七章 日の出王、月円に向かい、正義について講述す
- 第十八章 日の出王、月円に向かい、正義の本質について講述す
- 第二十章 月円、幸運の無常と幸福の変易について論ず
- 第二十一章 月円が息子の賢明に言い残したこと
- 第二十三章 月円が日の出王に書き残した遺書
- 第二十四章 日の出王、賢明に接見す
- 第二十六章 賢明、日の出王の宮廷に仕える
- 第二十七章 賢明、国王に向かい、智恵の形状について講述す
- 第二十八章 賢明、国王の備えるべき条件を論ず
- 第二十九章 賢明、大臣の備えるべき条件を論ず
- 第三十九章 日の出王、覚醒に書翰をしたための
- 第四十章 賢明、覚醒のもとへ赴く
- 第四十一章 覚醒、賢明互いに弁論す
- 第四十二章 覚醒、賢明に対して、今の世の欠点不備を論ず
- 第四十三章 賢明、覚醒に対し、現世を幫助して来世を得るを論ず
- 第四十四章 覚醒、国王に書翰を奉る
- 第四十五章 日の出王、再び覚醒に書翰を与える
- 第四十六章 賢明と覚醒の二度目の弁論
- 第四十七章 賢明、覚醒に対し、如何に国君に仕えるかを論ず
- 第五十一章 哲人、学者に如何に対するかを論ず
- 第五十六章 詩人に如何に対するかを論ず
- 第五十七章 農民に如何に対するかを論ず
- 第五十八章 商人に如何に対するかを論ず
- 第五十九章 牧民に如何に対するかを論ず
- 第六十章 手工業者に如何に対するかを論ず
- 第六十一章 貧しき者に如何に対するかを論ず
- 第六十五章 賢明、覚醒に対し、宴席に赴くときの礼儀について論ず
- 第六十六章 賢明、覚醒に対し、宴席に客を招くときの礼儀について論ず
- 第六十七章 覚醒、賢明に対し、隠遁と知足について論ず
- 第六十九章 覚醒、賢明のもとに到来す
- 第七十章 日の出王、覚醒と会見す
- 第七十一章 覚醒、国王に対し戒める
- 第七十六章 覚醒、病に冒され、賢明を呼び寄せる
- 第七十七章 賢明、覚醒に、夢解きについて論ず
- 第七十八章 覚醒、賢明のために、夢について説く
- 第七十九章 賢明、覚醒のために、夢を説く
- 第八十章 覚醒、夢について別な解釈を示す
- 第八十一章 覚醒の、賢明に対する遺言
- 第八十二章 胡馬魯、賢明に向かつて、覚醒がすでに世を去ったことを謹んで告げる
- 第八十三章 胡馬魯、賢明を慰む
- 第八十四章 賢明、覚醒を哀悼す
- 第八十五章 国王、賢明を慰む
- 附篇の一 青春が過ぎ去り、老いが到来する事を嘆き悲しむ
- 附篇の二 世の風俗天下及び人心の古びざるを論ず
- 附篇の三 筆者、ユスブ・ハジ・ハジブの自己に対する戒め
- 3) ユスブ・ハジ・ハジブについては、漢文文献、アラブ語文献、ペルシャ語文献等の古代文献の中に一切その記述がないという。12世紀の書誌学者、サマンニ・アブ・サイドは『kitabu-al-Sansab』という書の中で、11世紀のカシガルの作家及び彼等の著作を概説しているが、その中でもユスブについては一言も触れられていないという。故にユ

スプについては「福楽智恵」に書かれている事柄からしか理解するほかない。1018年或いは1019年に生まれ、卒年は不詳、「福楽智恵」の完成に18カ月かかっているが、先ずパラサフンで筆を執り、1068年にカシガルに移った後も書きつづけて1069年に完成させたと言われる。時にユスプは54歳であったと言う。

- 4) カラハン王朝 紀元744年(唐天宝三年)、回鶻部の連合カラロク等の部が後突厥汗国を倒して唐朝と密接な関係を持つ回鶻汗国を樹立した。840年(唐文宗開成五年)回鶻汗国はキルギスのために滅ぼされた。回鶻の諸部はそこで大規模に西域に移り、そこでもとから居住していた回鶻の遊牧部族や土着の人々と融合し、新たな歴史的発展の時期が始まった。10世紀から11世紀にかけて宋王朝と併存していくつかの政権が出現した。たとえば北方の契丹人の政権、青藏高原の一部の地区の吐蕃人の政権、河西回廊の甘州の回鶻政権、トルファン盆地及びその周辺地区の高昌回鶻政権及びクチャからブハラにかけてまたイサイク湖からホータンにかけてのカラハン王朝政権等がそれぞれである。初めはパラサフンを後にはカシガルを王都としたカラハン王朝政権は古代ウイグル人がその樹立に関わった王朝で、中央アジア地区全体の経済、文化の発展に重要な役割を果たしたのである。
- 5) トルファン 新疆ウイグル自治区の区都ウルムチの東南約180キロ、火炎山の麓にある。現在高昌故城、交河故城の遺跡がある。
- 6) カラホリジャ (Karaholija) 現在のトルファンに近いと思われるいわゆるカラコージョ (Karakhojo) のことであろう。
- 7) ベシバリ (Beshbali) (別八里) 10世紀から12世紀にかけて天山ウイグル王国が国都を置いた所の一つでいわゆるビシバリク (Bishbalik) であろう。現在ビシバリク古城遺跡がある。中国語では庭州、北庭。
- 8) アジプ・アシム (ǰip Asim) 不詳
- 9) 十二ムカム (十二木卡姆) 9世紀頃からウイグル民族の間に発生し15世紀ぐらいにかけて完成し、現在もなおウイグル民族に広く親しまれている舞踏音楽。現在知られているのはこの十二ムカ

ム以外にハミムカム、タランムカムがある。器楽曲、歌曲、間奏曲、舞曲等からなる壮大な組曲(套曲)である。

- 10) オルフン (Orhun) 渓谷 モンゴル高原中央部から北に向かって流れ、ロシアとの国境の町スフバートルを経てバイカル湖に注ぐ河。ここに言う「石のはめ額」とは恐らくトクテツの第二カガン国を成立させたクトウルクの子、ビゲルカガン、キョルクカガン兄弟のうち弟をたたえたトクテツキョルテギン碑文のことであろう。
- 11) エニセイ (Yenisey) 渓谷 モンゴル国の北トゥーヴァ共和国のサヤン山脈から北に向かって流れ、カラ海に注ぐ河川。この場合の「石のはめ額」が何碑文を指すかは定かでないが、中央アジアに残されたトクテツ語碑文としては、キョルテギンの兄のビゲルカガンの碑、第二カガン国成立にあたって功労のあった長老トウニユククの碑、シネウス碑文、カラバルガスン碑文等がある。
- 12) 高昌汗国 高昌の名は前漢期に起こる。当時トルファン東部の東側、勝金口の南側の二堡と三堡との間にあった古い都市及びその周辺を高昌と呼んでいた。そこには高昌壁があり、「地勢高峻、人庶昌盛」とされたことによりその名が由来するといふ。

BC108年前漢はトルファンの地をめぐる匈奴と争い、ここに初めて漢の中央勢力が入った。

BC89年(征和四年)トルファン地区の車師王は漢に降り、漢領の一部となった。

BC60年匈奴の日逐王先賢揮が漢に投じ、漢は西域に都護を置いた。こうしてトルファンは正式に漢に帰属する事となった。(高昌故城の原型はほぼこのころ作られた)

後漢時期にも車師王国は依然として存在していたが、中央から増強派遣された漢軍が屯田駐軍して、匈奴との天山南北をめぐる戦いの重要な基地となった。

西晋(256-316)の末年、涼州の武威に居っていた漢人張軌は前涼を号し、その孫張駿は位を継ぎ高昌を攻めて、ここに高昌郡を設けた。

AD439年北魏は甘州の北涼を滅ぼし、沮渠無諱は西に移って高昌郡にとどまった。沮渠無諱の死

後、柔然が天山の南北に達した。そこで漢人の副伯周が高昌王となり、以後三度王は変わったが、麹氏高昌は140年間、北魏・隋・唐と密接な関係を保った。

640年(唐貞観十四年)麹氏高昌は西トクケツと連合して唐に叛き、その為、唐は高昌を攻めてこれを滅ぼし、西州都護府を置いた。その管轄は前庭県・交河県・蒲昌県・天山県と柳中県の五県であった。

AD755年(天宝十四年)安史の乱が起こり、西域に対する中央の支配力が弱まったため、吐蕃がウテン、北庭、西州、亀茲等の天山南北の地を占有し、高昌もこの時吐蕃の管轄に帰した。

その後ウイグルの首領僕固俊は吐蕃を破り、唐代高昌が西域で領有していた地はすべて僕固俊に帰した。

744-745年 キュ=ビルゲ=カガン(懐仁可汗)

747-759年 葛勒可汗(英武可汗)

759-780年 キュルク=ビルゲ=カガン(牟羽可汗・英義可汗)

780-789年 アルプ=クトウルク=ビルゲ(武義可汗)

791-795年 クトウルク=ビルゲ(奉誠可汗)

795-808年 キュリュク=ビルゲ=カガン(懐信可汗)

808-821年 アルプ=ビルゲ(保義可汗)

821-823年 クチュルク=ビルゲ(崇徳可汗)

823-832年 アルプ=ビルゲ=カガン(昭禮可汗)

832-839年 アルプ=キュルク=カガン(彰信可汗)

の時代を指す。この後840年キルギスがウイグルを攻め、848年漠北ウイグル汗国は潰滅する。しかしこの時ウイグルの一支が天山山脈北部の北庭一帯から、吐蕃(チベット)の領地を奪い、程なくして天山を越えて南下し、吐蕃の支配していたオアシスを領有し、そこに建てたのが高昌ウイグル汗国である。後にエンギ、クチャ、にまで領土を拡大したが、12世紀(1129年)には西遼に従属することになった。高昌ウイグル王Barguk Art Teginは自ら願ひ出てチングス汗のモンゴル帝国に帰属したが、功あったためにチングス汗の特別

の優待を受け、旧の領域と国内の制度はそのまま維持する事が出来た。13世紀後半40年にわたるモンゴル西北の宗王海ドゥの反乱が高昌ウイグル王国に致命的な打撃を与え、1270年高昌王国の首都ベシバリは反乱軍の手に落ち、国王は高昌を退いて甘肅省の永登県に亡命した。こうして高昌王国は1284年に滅びその領域はチャガタイ汗国に併入された。

- 13) 『トクケツ(突厥)語大辞典』(Diran Nulu Katip Turk) 『宋史』では「黒韓王朝」と称されているカラハン朝時代に、カシガルの人ムハメド・カシカリが編集した現存最大の古代トクケツ語辞典。1072-1076年に編者がアッバス王朝の第27代のハリハに献ずるために、アラブ文字を用いて編集した。収録したトクケツ語彙をアラブ文字で解釈したもの。その中には約300篇の文学的断片、即ち古代トクケツ語諸部族の民歌、詩、銘言、諺言、歴史伝説等がある。それらの多くは民間に流布した逸名の作品であり、文人の作品も少量みられる。この辞典は11世紀に成ったものであるが収録されている民間文学断片の多くは、より古いものが多く狩獵に関する詩歌等はその例に当たる。この辞典の現存唯一の古抄本は全部で638ページで、約13世紀に原本に依って書写されたものであり、1914年にイスタンブールで発見された。
- 14) 『真理への入門』(Atibetul hakayik) カラハン王朝の衰亡期、12世紀末から13世紀初めにかけて、盲目の詩人アフマイテイ・ユコナイク(Adib Ahmad)が書いた、ウイグル、トクケツ民族のイスラム教倫理のための長編訓戒詩で、この作品の内容は当時の社会状況のある程度反映している。
- 15) 『オクズ・ナーメ』(Okuz Name) 『オクズ=カガン説話』とも言われる。この祖型は13世紀頃ウイグル語で記録されたもので、中国新疆では『烏古斯可汗伝説』、或いは『烏古斯可汗伝』と呼ばれている。現存する唯一のウイグル語写本は、パリの国民図書館(Bibliothèque Nationale)にあり、いわゆるChy. Schefer収蔵本である。これは晩期古代ウイグル語に属するもので、ウイグル草書体で書かれているが、巻頭末尾に欠落があるもののほぼ全体をなしているものと思われる。毎頁9行、

42ページから成る。この『烏古斯可汗伝説』は、ウイグル民族がまだイスラム化する前のもので、ウイグルの古代伝承を古体のままの姿で残していると考えられる。しかしその後のカラ・コユンル朝のマフムド・イブン・アブド・アッラーブの『トルコマン史』や1310年にラシード・アッディーンによってペルシャ語で書かれた『集史』等に取りられた烏古スは生まれながらの熱心なモスリムで、信仰のためには父親とも戦ってこれを亡ぼす、と言う完全にイスラム化した物語に変わっている。『オクズ・ナーメ（ウコスの手紙）』『オクズ＝カガン説話』等と称される場合は、こうしたイスラム化以後の『烏古斯可汗伝説』を指していることが多いがこの場合は烏古ス（ウコス）についての物語というような包括的な書名として使われているのであろう。

- 16) 『アルギナ・クンの詩』(Argins Kun Dastani) 注15) に掲げた『集史』に取りられているモンゴル族の族祖発展の物語の一部。アルギナ・クンとは、モンゴル族がトルコ諸部族に大虐殺された後、難を逃れた少数のモンゴル族が移住し定住した場所の名前でそこからモンゴル族は大草原に発展していくことになる。『周書・異域・突厥伝』にはほぼ同内容のトクケツに関する族祖発展の物語がある。ウイグルはこの物語を自らの出自を跡付けるものとして重要視している。
- 17) 『英雄 タン・アハ』(Tung Ah Batir) 中国語表記は阿夫拉西雅普 トクケツの民族的英雄の名前、ペルシャ語ではアフラシヤブと言う。
- 18) 『トクケツ語大辞典』にはカラハン王朝以前のトクケツ民族に関わる多くの古代詩歌が収められている。特に第一巻、第二巻にこの『英雄 タン・アハの追悼に関する詩』がある。
- 19), 20) 中央公論社『世界の歴史 大モンゴルの時代』杉山正明・北川誠一に依ればオクズ・ナーメに関するものとして知られているのはマフムド・イブン・アブド・アッラーブの『トルコマン史』ラシード・アッディーンの『集史』に異本が二種、1502年ムハンマド・サーレフの『選史 勝利の書』、また同じく中央公論社『世界の歴史 成熟のイスラーム』永田雄三 羽田正に依ればオク

ズ・カガンの片腕デデ・コルクトが語った12の説話からなる『デデ・コルクトの手紙』等がそれであるが、アフアズ・カディルハンの『トルキック・システム』という書はいかなる書か定かでない。

- 21) 『トンヨクコク・ステレ』(Tonyokok Stele) Steleは石碑・碑文のことであるから、これは『噉欲谷碑』である。『巴音楚克凶碑』とも言う。D・A・E・Klementsが1897年今のモンゴル人民共和国ウランバートルから60キロ離れたBayintsokto地区で発見した。この碑は現在もお発見地に存在している。碑文は二つの石碑に刻されており、全部で62行、紀元712-716年の間に建てられたという。トクケツ族の英明なる指導者トンヨクコクが民族再興のために人々の奮起を促した演説文を碑文として残したものである。
- 22) 『クルチキン・ステレ』(Kultikin Stele) 『闕特勤碑』のことで、『和碩柴達木一号碑』とも言う。この碑は1889年、今のモンゴル人民共和国のKokshin-Orhon溪谷のホシュオチャイダム地方で発見された。今なおもとの所に存在している。碑は大理石で、漢文と古代トクケツ文字で刻されている。トクケツ文字で記された部分は66行で、この碑は紀元732年に建てられたものである。碑文は大・小二つの石碑に刻され、小碑は13行で、あとは大碑の東面に40行、北面に13行、裏面は四つの部分からなるが、すべて漢文で書かれている。内容は主に闕特勤の演説とその軍功を讃えたものの。
- 23) 『玄奘伝』(The Biography of XuanZang) 玄奘は唐の僧、洛州の人、若くして出家し、大乘論を極む。貞観三年冬、秘かに原州を起って、西蕃諸国を経て、貞観七年インドにいたる。留まること十年にして多くの經典とともに貞観十九年京師に帰る。以後慈恩寺にこもって經典の翻訳に生涯を送る。伝としては『続高僧伝・四』『大慈恩寺三藏法師伝』『仏通載・十二』等がある。また旅程での西蕃諸国の状況を記した『大唐西域記』十二巻が玄奘の手によって残されている。ここに言う『玄奘伝』が上記のいずれに基づくものか、或いは全く別のものかはつまびらかではない。
- 24) 『アルトン・ヤルク』(Altun Yaruk) 『金光明最

- 勝王経』のこと。これは大唐沙門義浄がインド語から漢語に訳したものを更にウイグル語に翻訳したもの。訳者は新疆ベシバリ（北庭）の翻訳家 Singgu sali。書写されたのは1687年の6月から8月にかけてであり、それはこの跋文に記載がある。
- 25) 『スキタニ・イリグ・ベグの物語』(Qistani Ilig Beg) 『乞斯塔尼伊利克伯克故事』或いは『哈希塔那王』ともよばれている。これは高昌回鹘汗国時代のウイグル族の間に流布した回鹘文で書かれた仏教伝説。この回鹘文抄本は今世紀の初めトルファンに赴いたドイツの第三次探検隊が得たものである。研究に依ればこの物語は亀茲語から回鹘語に訳されたもので、漢文に訳されたものは日本の『大蔵経』第26巻にある。
- 26) 『マイテリ・シミット』(Mayteri Simit) 『弥勒会见記』のこと。紀元9世紀前後古代ウイグル語で書かれた全27巻にわたる長大な仏教演説物語集。回鹘文写本は世にいく種類が存在しているが、1959年に哈密地区で発見された写本は、およそ293葉(586面)でこれは現存する写本のなかで葉数の最も多いものである。原本は今ウルムチの新疆ウイグル自治区博物館に収蔵されている。
- 27) アプリングル・テキン (Apringur Tekin) Aprinqor Teginともつづる。高昌回鹘王国時代の、今なおその名が残っている数少ない詩人の一人。漢字表記では阿普林啜特勤。愛情について歌った詩や、マニ教に対する賛美歌の断片が今に残っている。
- 28) クル・タルカン (Kul Tarkan) 漢字表記は闕達干。高昌回鹘王国時代のマニ教賛美歌の中にその名が見える詩人。
- 29) アスグ 原文はAsh Torungとなっており、これが漢字表記、阿色格、ウイグル語音標表記 Asigに当たる人物かどうかは不明、今その音が最も近いと思われる人名に仮に当てておいた。
- 30) ハリムキシ (Kalim Keyxi) 漢字表記は哈里木凱什。高昌回鹘王国時代の、今なおその名が残っている数少ない詩人の一人。
- 31) シリヒ・テキン (Silih Tekin) 高昌回鹘王国時代の、今なおその名が残っている数少ない詩人の一人。漢字表記は不明。
- 32) 『キサ・スル・アンビア』(Kissə Sul ənbiya-Life of the Saints and Sages) ナスリディン・ラブクズ (Nəsridin Rabkuzi) の作品とするが詳細は解らない。
- 33) チャガタイ汗国 先ずオゴタイ汗国はジンギスカンの第三子オゴタイが封ぜられた所であり、その領域はイルチシュ河上流とバルカシ湖以東の地であり、首都はエミールであった。その孫のハイドウが元朝のフビライに対して反乱を起こし、失敗して1310年前後にチャガタイ汗国に併呑された。チャガタイ汗国はジンギスカンの次子チャガタイが封ぜられた所で、その領土は初め西遼旧地だけであったが、のちオゴタイ汗国を併呑してからは、天山南北アム河以東にまで拡大し、首都はアリマリクに置いた。しかし十四世紀には東西に分裂し、西部は1370年にティムール帝国に依って亡ぼされたが、カシガルに都を置いた東部も更に小国に分裂して1389年やはりティムールに亡ぼされた。このチャガタイ汗国期、ウイグル民族の居住地のほとんどは、その支配下にあった。
- 34) サツカキ (Səkkaki) 漢字表記は賽卡克。14世紀末から15世紀の初めにかけて生きたウイグルの詩人。当時から「ウイグル言語芸術の上で、最高の地歩にまで到達した優れた詩人」と評された。愛情と俠義を題材とした詩にすぐれ、ウイグル古典詩の一形式である格別勅を得意とした。
- 35) ルトウヒ (Lutfi) 漢字表記は魯提菲或いは洛特菲。15世紀のウイグルの著名な詩人。ペルシャ語とトクケツ語の両方の言語で詩を書いたが、後者の詩集は完全な形で伝わっているが、前者のは残っていない。代表作に『古麗と諾魯孜』という長篇叙情詩がある。
- 36) アムリ (əmri) 未詳
- 37) ガダイ (Gadayi) 漢字表記は尕達依。1403-1404年頃生まれる。15世紀末までヘラッドで生涯創作活動をつづけた著名な抒情派の詩人。90歳まで生きたという。
- 38) アタイ (Atayi) 漢字表記は阿塔依。彼の詩集は現在にただ一冊のみ手書きの孤本として、ペテレスブルグに残っているだけである。抒情の格別勅

に秀でていたという。

- 39) マハメト・ハラズミ (Məhəmmət, Harəzmi) 漢字表記は穆罕默徳・花喇子米。14世紀に活躍したウイグル詩壇のすぐれた詩人。その代表作は『愛情篇』で全570行からなる長篇である。14世紀ウイグル詩壇の珠玉の一篇といわれる。
- 40) ヤキニ (Yəkini) 未詳
- 41) ケゼル (Kezel), 42) マハマス (Məhəmməs), 43) ムサダス (Musəddəs), 44) タルジイバンド (Tarjiiband), 45) ムサマン (Musəmən), 46) ルバイ (Rabai) これらはウイグルの文学表現ジャンルをウイグル語の音標に従って表記したものであろうが、何を意味しているかは解らない。
- 47) 「グル・ワ・ナワルズ」(Gull Wə Nəwruz) 前掲注35) ルトウヒの作品「古麗と諾魯孜」と言う長篇叙情詩。諾魯孜王子と古麗公主との純真な愛情を描いたもの。彼は99歳で逝世したという。
- 48) ヤルカンド汗国 漢字表記は葉爾羌汗国。ヤルカンド汗国を建てたサイド汗は東チャガタイ汗国のアヘイマ汗の第三子。1514年サイド汗はヤルカンド汗国を樹立して汗位についた。1519, 1530年に二度ハサク、キルギスの領有していたハタク山を攻めて併呑し、更にカシミール、ラダク、チベットまで攻めてその版図を拡大した。1533年サイド没し、子のラシドが汗位についた。ラシドの死後、その次子アブドカリナムが汗となり、トルファン、ハミ地区の反乱を平定し、ヤルカンドの領土とした。アブドカリナムの死後、弟のマヘイマが位を継ぎ、最も繁栄した時期を迎えたが、その子のアヘイマが汗位を継いでアヘイマの死後、次子のアブドラタイプがあとを継いだ。その死後アヘイマ汗の孫、スタンアヘイマを位につけたが、その兄弟のスタンマハムが汗位継承をめぐる内紛を起こし、結局スタンマハムが位についたが後に家臣に謀殺され、再びスタンアヘイマが位についた。

ヤルカンド汗国の東部は明と友好的な関係を保ちつつアブツイン汗が40年間統治した。その長子アブドラ汗はヤルカンドを攻めたが、撃退されつつも力を蓄え、1638年カシガルを攻め、スタンアヘイマ汗は汗位を放棄して逃走し、アブドラ汗が

ヤルカンドに入って汗位につき、東西ヤルカンド汗国は再び統一された。

その後ヤルカンド汗国国内では多くの反乱が起き、安集城の反乱を、アブドラ汗は結局収めることが出来ず、長子のユラハルスとも不和となり、更に家臣達の内紛に巻き込まれて1668年に死んだ。

1668年ユラハルスは汗となったが、つづいた内紛のためこれも殺害され、その子のアブド・ラタイプが汗となったが、アクスのイスマルがヤルカンドを攻め、アブド・ラタイプ汗はカシガルに逃げた。1670年イスマルはヤルカンドで汗位についた。1678年ジュンガル汗国のカルタンがヤルカンドを攻め落とし、イスマルとその親族は捕虜となった。こうしてヤルカンド汗国は名実ともに滅び、天山以南の広大な地区はすべてジュンガル汗国の属領となった。

- 49) スルタン・サイドハン (Sultan Səidhan) 前掲注48) のチャガタイ汗国アヘイマ汗の第三子で、ヤルカンド汗国の建国者サイド汗のこと。
- 50) アブトリサン (Abdurixithan) この人物については不明であるが、ここに書かれているように、「文学活動を押し進めたサイドハンの息子」ではないが縁者であるミルザ・マヘイマ・ハイタルは、サイドハンを継いで汗位についたサイドハンの次子であるラシドに捧げて、『ラシド史』を著している。またこれも息子ではないが開国の功臣を縁者に持つサ・マハム・ソチスは、『ラシド史』の続編とも言うべき『編年史』を著している。
- 51) スルタナ・アマンニサハン (Sultana Amannisahan) 漢字表記は阿曼尼莎汗 サマルカンド汗国二代目君主ラシド汗の妻で、下注52) のキデイルハンとともに前掲注9) ムカムの整理と編集に大いに貢献した。アマンニサハン自身が当時の有名なムカムの演唱者であり詩人でもあった。またその夫ラシドハンも父親サイドハンとともに熱心なムカムの愛好者であり、ともに音律に造詣深く、あらゆる楽器に巧みで、ムカムの収集と整理の唱導者でもあった。
- 52) キデイルハン・ヤルカンデイ (Kidirhan Yarkandi)

漢字表記は玉素夫・カディ爾汗。注51)のアマンニサハンとともにムカムの整理編集に生涯かけて携わった人物。

- 53) ヒルクティイ (Hirkiti) ムハメド・イミン・ハイルクティイ (穆罕默德·伊明·海爾克提) 1634年カシガルの園丁村で生まれる。16年間経文を読んだ後、初めて創作活動にはいる。時に30歳。代表作は『愛情と苦悩』(『労働と愛情』とも訳される) 薔薇と鴛鴦を擬人化した優美な長詩である。1724年卒。
- 54) ムハメド・サダイク・カシカリ (Muhəmmət Sadik Kəxkəri) カシカリの人。十七世紀末から十八世紀中葉にかけていきた人。代表作は『和卓伝』。作者自身の家系であるヤルカンド汗国時代の白山派の有力な和卓阿帕克一族の系譜とこの一族の清朝にいたるまでの活躍をえがいたもの。
- 55) アブドレヒム・ナザリ (Abdurehim Nazari) 漢字表記は阿不都熱依木・那扎爾。この時期の代表的な作家。それまででのウイグル文学が持っていなかった現実の生活を基盤とした作品でしられる。
- 56) クナム (Gummam) 不詳
- 57) ザリリ (Zəlili) 漢字表記は翟梨里。庶民の苦しい生活を描き、支配者から受ける圧迫に反抗する人々の思いを描くものが多い。また新疆各地を遊歴した時期が比較的長かったため、故郷のヤルカンドになつかしい思いを寄せた作品にもすぐれたものが多い。
- 58) ナワルズ・ズセイイ (Nawruz Ziyaiy) 不詳
- 59) トルディ・ハルビイ (Turdi Hərbiy) 不詳
- 60) ビラル・ナジム (Bilal Nazim) 不詳
- 61) タジャリイ・モウラ・ビラル (Təjəlli Molla Bilal) 漢字表記は毛拉・被拉利。この時期を代表する作家のひとり。
- 62) イブライム・モシフリ (Ibrayim Moxhuri) 不詳
- 63) ウイビティ (Uwibiti) 不詳
- 64) サボリ (Sabori) 漢字表記は阿密爾・胡賽因・撒布爾【サボリ詩選】としてその作品が残っており、後のウイグル詩壇に影響をあたえた。
- 65) アルシ (ərxi) 不詳
- 66) ナワイ (Nawayi) 漢字では扎木丁・艾利希爾・納瓦依と表記される。1441年生まれる。若くして

コラサン王朝の宮廷に仕えたが放逐されて以後創作活動にはいる。『四部詩集』三千百三十首及び五部の長篇詩を集めた『五部詩集』として残るほか、現代ウイグル民族の間で歴史的に長く愛好され、また今なお広く愛好されているムカムの中にも多くのナワイの詩がとりいれられている。その意味では、ナワイは15世紀後半以来、ウイグル民族にとって、詩の創作の面でも、鑑賞の面でも、最も深くて広い影響を与えた詩人であり、かつまた最も愛された詩人と言うことができる。1501年没。

- 67) ヴィエンナ (viennaウイーン写本) 或いは赫扎特写本と言う。1439年、ハッサン・カラ・サイラ・シエミスに依って、ウイグル文で書写された。1474年イスタンブールで発見された。現在ウィーン国立図書館にある。
- 68) カイロ写本 アラブ文字で書かれている。14世紀前半に書写されたものと思われる。1896年エジプトのカイロで発見された。
- 69) フェルガナ (Fergana) 写本 アラブ文字。最も古くて最も完全なものと言われる。12世紀末或いは13世紀前半に書写されたとされる。1913年に発見された。

以下に掲げる70) 番から131) 番に当たる注の多くは、旧ソ連圏或いは旧東欧諸国と呼ばれた国のウイグル歴史文化、『福楽智恵』等の研究者であるが、そのほとんどについて、訳者は情報を持っていない。故に今後の更なる調査に待たねばならないが、その後々の調査の便宜のために、項目のみを列挙し、その活動が中国語文献などに依って少しでも解るものについては、末尾にまとめてだしておいた。

- 70) ジョベル (Jobel) フランスアカデミーの中近東言語学者
- 71) オットー・オルブライト (Otto Olbrit) ドイツの『福楽智恵』研究者
- 72) ワミブリ (Wamibri) ハンガリー
- 73) エヌ・ジップ・アシム (N. Jip Asim) トルコ
- 74) リシット・ラフミティ・アラト (Rxit Rahmiti Arat)
- 75) ソドリ・ナハスド・アドリ・アガル (Sodri N

- əhsud Adil Agar) トルコ
- 76) コプロリ・フォアルザド (Koprolı Foarzad) トルコ
- 77) ボンバミ (Bombami) イタリア
- 78) マロフ (Malov) 帝政ロシア
- 79) ラドロフ (Radlov) 帝政ロシア
- 80) タルトリド (Tartolid)
- 81) サムロウイング (Samlowing)
- 82) アマト・ザキ・ワリデイ (əhmət Zəki Wəlidi) ソ連
- 83) イミイル・ナジブ (Imir Nəjip)
- 84) キユム・カリムウ (Kıyyum Kərimuw)
- 85) トムスン (Tomsin) デンマーク
- 86) ビロクリマン (Biroklıman) ドイツ
- 87) ハルトマン (Hartman)
- 88) ワミブリ (Wamıbrı) ハンガリー
- 89) ピイティル (Pitir) ウズベキスタン
- 90) ワルタイトワ (Walıtowa) ソ連
- 91) アブドラマナフ (Abdurahmanav)
- 92) ゴレブネフ (Golepnev)
- 93) 74) に同じ
- 94) ロバート・ダンクロフ (Robert Dankrov)
- 95) コロノフ (Koronov)
- 96) バルトリッド (Bartolid) ロシア
- 97) ナリンバイエフ博士 (Dr. Narınbayev) キルギスタン
- 98) ハシムフ博士 (Dr. Hasımuv) カザフスタン
- 99) マハスト (Məhsut) トルコ
- 100) イブン・シン (İbn Sin)
- 101) コプロリ (Koprolı) トルコ
- 102) 96) に同じ
- 103) ツクセワ (Tukuxewa) 中国
- 105) エイ・ハロソフ (A. Harosov) ソ連
- 106) 66) に同じ
- 107) バシコフ (Bashikov)
- 108) ティニシフ (Tınısiv)
- 109) カン・ハサン・ブクラハン (Khan Həsən Bukrahan)
- 111) アルトゥン・オルダ汗国
- 112) 109) に同じ
- 113) ワリトワ (Walıtowa) ソ連
- 114) ヒルベック (Hilbek) ソ連
- 115) グルロウイグル語 (Gurulo Uighur)
- 116) アハマット・ジャイ (əhmət Ziyai) ウイグル詩人
- 117) サドリ・マハスト (Sadri Məhsud) トルコ
- 118) 116) に同じ
- 120) サリヒディン (Xərfidin) ウイグル
- 121) ツァイ・ツァンチン (Cai Can-jing) 漢族
- 122) ワハプ (Wahap) ウイグル
- 123) アブデウスケル・ムハメド・イミン (Abdushukur Muhammed İmin) ウイグル
- 124) トゥルグン・アルマス (Turgun Almas) ウイグル
- 125) マハマト・ズヌン (Məhəmmət Zunun) ウイグル
- 126) ドウ・シャオユアン (Du Shao-yuan) 漢族
- 127) シン・フェンシ (Xing Fen-shi) 漢族
- 128) リェウ・クイリ (Liu kui-li) 漢族
- 129) ワン・ピンファン (Wang Ping-fan) 漢族

以下漢語文献に依って解る点を挙げておく。

- 74) 『福楽智恵』の三本の写本を校勘し、全文ローマ字に依る表音転写本を作り、また1959年トルコ語散文体の翻訳を出版した。R.R.アラトの表記あり。
- 82) C.E.馬洛夫, 96) H.格列布涅夫, 95) T.A.阿不都拉赫曼諾夫, 116) A.A.瓦里托娃 1983年前後に、『福楽智恵』の部分ロシア語訳を出版した。
- 98) 羅伯特, 丹柯夫 1983年英語版の『福楽智恵』をシカゴから出版した。
- 84) 達爾托里德『ウイグル文献がモンゴル人に及ぼした影響を論ず』科学出版社, 1968年
- 104) 李琪『福楽智恵』に関する外国語文献の参考資料を漢語に翻訳した。
- 110) イルカン国 チンギス汗の末子, トゥルイの子フラグは兄のモンゴル帝国第四代皇帝モンケ(憲宗)から西アジア遠征の命を受けて1256年カピス海南岸のイスラム教イスマイル派を亡ぼし, 58年アッバース朝の首都バグダードを攻めてカリフを倒し, 60年にアレppo, ダマスカスを攻略, 63年今のイラン, イラクの地にイル汗国を建て, ダブリーズに都を置いた。四汗国(オゴタイ, キプチャク, チャガタイ, イル)の一つ。フラグの後マムルーク朝, キプチャク, チャガタイ汗国等としばしば戦い国力は疲弊したが, 第七代カーザン汗,

第九代アブー、サイド汗が中興した。サイド汗には後継者がなく、度重なる内紛の後いくつかの地方政権に分裂し、やがてティムールの攻撃を受けて1411年に滅亡した。

- 122) 烏鉄庫爾「ウイグル人民の十一世紀における偉大な思想家、哲理の詩人、ユスブ・ハジ・ハジブ」1982年3月『新疆大学学报』の著者。
- 130) 郎桜 (Lang Ying) 「ユスブ・ハジ・ハジブとウイグル文学」1986年6月『カシガル師範学院報』の著者、中国社会科学院民族文学処所属。

参考文献

伊原弘、梅村担『世界の歴史 7 宋とユウラシア』中央公論社。

佐藤次高『世界の歴史 8 イスラーム世界の興隆』中央公論社。

杉山正明、北川誠一『世界の歴史 9 大モンゴルの時代』中央公論社。

永田雄三、羽田正『世界の歴史 15 成熟のイスラーム社会』中央公論社。

以上、1997、98年刊行。

『世界史年表・地図』吉川弘文館、1997年。

『標準高等地図』帝国書院、平成8年。

竹之内安巳『漢日欧対照世界地名辞典』鹿児島短期大学南日本文化研究所、1977年。

唐 玄奘『大唐西域記』上海人民出版社、1977年。

唐 令狐德棻『周書』中華書局、1971年。

王庭凱、陳延琪『中国少数民族論著索引』新疆人民出版社。

『世界地図集』北京地図出版社、1972年。

中国社会科学院文学研究所『中国少数民族文学』湖南人民出版社、1983年。『維吾爾族古典文学作品選編』新疆人民出版社、1984年。

林幹、高自厚『回紇史』内蒙古人民出版社、1994年。

維吾爾族簡史編写組『維吾爾族簡史』新疆人民出版社、1991年。

紀大椿『新疆歴史詞典』新疆人民出版社、1994年。

雷茂奎、李竟成『絲綢之路民族民間文学研究』絲綢之路研究叢書5、新疆人民出版社、1994年。

趙国棟、劉賓編『上古至高昌汗国時期的文学』維吾爾族古典文学大系1 新疆人民出版社、1995年。

劉賓編『喀喇汗朝時期的文学』維吾爾族古典文学大系2 新疆人民出版社、1995年。

張宏超編『察合台語早期文学』維吾爾族古典文学大系3 新疆人民出版社、1995年。

張世榮、趙国棟編『中古与近代民間文学(上)』維吾爾族古典文学大系8、新疆人民出版社、1995年。

趙国棟、張世榮編『察合台語后期文学(上)』維吾爾族古典文学大系10、新疆人民出版社、1995年。

(完)

(1998年4月13日受理)